東奥日報社提供

東　奥　日　報
2019年（令和元年）9月12日（木曜日）（16）

空き家を活性化の拠点に

八戸

リノベ事業 八戸工大スタート

市中心街、地域に開放

八戸市の八戸工業大学は本年度、市中心部の空き家のリノベーションプロジェクトをスタートさせる。第1弾として内丸地区の空き家を借り、地域住民と共に利活用についてアイデアを出し合い、改装に着手する。地域に開かれた空間とする方針だ。（月舘慎司）

リノベーションする空き家をチェックする八工大学生＝八戸市内丸

同プロジェクトは、全国的に増加する空き家について学生、教職員、地域住民が共同でリノベーションを実施することで、地域活性化と学生と地域の交流拠点の形成を目指す。内丸地区では新市美術館の建設が進む一方で、空き店舗・家も増えている。

今回借りたのは、本八戸駅近くのかつて自転車店や雑貨店だった2階建ての店舗兼住宅で、延べ床面積は約130平方㍍。同大学はここを改装するとともに、中心街における大学のサテライトにする方針だ。

10日、会見した同大感性デザイン学部の皆川俊平講師は、地域の人にも活用される空間にリノベーションする方針を示すとともに、学生が改装しているプロセスを公開するとした。具体的には可動できるデスクやベンチをつくったり、イベント用の移動式屋台を製作する構想があるという。この場所で大学のゼミも実施したいとした。

内丸地区の空き家の外観

参加する学生はさまざまな学部・学科を想定し、改装は本年度内に完了する予定。将来的には市中心街の別の空き店舗・家のリノベーションにも取り組みたいという。皆川講師は「学生が社会人になっても戻ってくる場所にしたいし、学生のホームグラウンドにしたい」と述べた。プロジェクトに参加する感性デザイン学部3年の中村緑夢さん(20)は「中心街にある自分たちの活動拠点として、その活動内容によってさまざまな形に展開できる空間にしたい」と意気込みを語った。

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」